

1962年8月24日(昭和37年)噴火120時29分より微動記録、20時57分有感地震発生。北東山腹の海拔200~400m辺から22時20分噴火(1940年の噴火場所に近い)。多数の火孔から溶岩を海中にまで流出。噴火は30時間で終了したが、25日3時ころから有感地震頻発し、8月30日には伊豆部落で2000回以上に達した。このため学童の疎開があり、島民極度の不安に陥ったが、地震も次第におさまった。地震の震源域は噴火地域(北東側)でなく、島の西北方向であった。被害は焼失家屋5のほか道路、山林、耕地など。噴石丘「三七山」生成。噴出物総量900万m³。1963年4月、9月(昭和38年)雄山の山頂付近に新しい噴気地帯出現。

[『記録 昭和58年三宅島噴火災害』東京都(1985/9), p.305-307]

1-2. 1983年噴火災害とその後の対応

1. 1983年(昭和58年)噴火の経緯

01. 昭和58年は噴火の前兆は無感地震の連続発生で始まった。

噴火の前兆となった地震活動は、無感地震の連続発生で始まり、この無感地震は、13時58分から雄山山頂の北3.2kmの山腹に設置してある、三宅島測候所の倍率1000倍の地震計で記録し始めた。地震は急激に増え、振幅も大きくなり、やがて阿古でゆれが感じられるようになった。14時47分、神着の三宅島測候所で、最初の有感地震(震度1)を観測した。有感地震は噴火までに合計5回観測され、特に15時22分には1分間に震度2の地震が2回あった。

15時23分、地震計に火山性微動が現われ、以後、微動の振幅は急激に大きくなった。この火山性微動ではマグマが噴出する時によく現われるので、微動の始まりと噴火の時刻が一致するとすれば、噴火開始は15時23分となる。このころ、阿古の人は噴火が始まったのを見たが、神着の測候所で噴煙を確認したのは15時33分であった。

(中略)

また、噴火前の昭和57年12月~58年1月には三宅島南方海域(御蔵島西方海域)で地震が群発した。なお、9月にも三宅島北方海域(新島北東海域)で小さな群発地震があった。しかし、伊豆半島から同島付近にかけての海域では、群発地震がときどき起きており、これが噴火とどのような関係があるかは、まだわかっていないが、気象庁では要注意と考えている旨、東京都等の防災関係機関に連絡していた。三宅島測候所では火山観測に細心の注意をはらい、噴火が起きた際に行う個人の業務分担などをも決めると共に、三宅村役場、三宅支庁、警察等の現地防災機関と異常時の処置についての事前の打合せ等を行っていた。[『記録 昭和58年三宅島噴火災害』東京都(1985/9), p.312-314]

02. 昭和58年の噴火被害総額は255億円余に達したが、死傷者・行方不明者は全くなかった。

噴火の発生は、昭和58年10月3日15時23分頃と推定されている。三宅島測候所による最初の噴煙観測は同日15時33分であり、噴火活動は翌4日未明まで続いた。

噴火地域は、雄山南西部の山腹に生じた割れ目で、雄山中腹の村営牧場から島南端の新鼻に達する約4.5kmの地域である。この割れ目には90個以上の火口が並び、100m以上の高さに灼熱の溶岩を噴き上げ、火のカーテンを形成した。更に、島南端の新澗池・新鼻付近ではマグマ水蒸気爆発が発生した。なお、最初の噴火点は雄山南西部中腹の通称「二男山」付近である。

溶岩流は、山腹の火口群から流出し三本に分かれて山肌を焼きながら山を下り、噴火発生約2時間後にはそのうちの一本が島最大の集落のある阿古地区を襲い、同集落を埋没潰滅させるという悲劇を生んだ。噴出溶岩量は、約700万m³(丸ビル容積の約27倍)である。

黒い噴煙は、高度約1万mに達し、西風によって大量の火山灰や火山礫を島の南東部一帯に降下させた。降り積もった火山灰礫の厚さは、数cm～1mに及び、坪田の集落では最低でも12cmとなっている。このため、空港の閉鎖、道路の不通、農林水産物の被害等が生じ、人々の生活に大きな影響を与えた。降下噴出物の量は、約600万m³(丸ビル容積の約23倍)である。

地震は、噴火発生の日から4日間で震度5を1回含む有感地震が99回発生した。

この結果、被害総額は255億円余に達したが、これは三宅村予算(昭和58年度普通会計当初予算18億9,451万円余)の約13.5倍に当たり、島の経済にとって致命的打撃となった。唯一、不幸中の幸は死傷者・行方不明者が全く無かったことである。[『記録 昭和58年三宅島噴火災害』東京都(1985/9), p.87-89]

03. 「昭和58年10月3日13時58分の地震が噴火に結びつくとは思わなかった。」と、当時の記述がある。

その時、人びとは
マグマのうごめき
静かだった。

10月の午後の空は青く澄み、高い松の木の梢が僅かに揺れていた。

三宅島の北端に位置する三宅島測候所。事務室の窓の外を鳥の影がよぎった。

コジユケイらしい。突如、「ピーッ、ピーッ……」

地震計に直結したアラームが、けたたましく鳴り出した。バラバラと所員が駆け寄る。

10月3日13時58分。急を聞いて浜口所長が、駆けつけた。地震計の記録紙は、小さいが火山性地震らしい震動を頻りに記録してゆく。

火山性地震 それが多発することは地下のマグマが活動していることを示す。いつ噴

第1期 三宅島の概要

火するか、噴火するかしないかも現在の科学では分からない。しかし、異常であることは事実である。

所長の顔に緊張の色が走った。直ちに連絡をとろうと思った所長は「しかし………」と思い直した。

この地震計の感震部(ピック)は測候所から 1,350メートル離れた地点に設置され、ケーブルで結ばれている。キャッチした震動を千倍に増巾して伝える敏感なものである。このため、付近での工事や農作業の震動まで感知してしまう。(慌てて火山情報を出し、人々を混乱に陥れてはならない。まず確認しよう。)

所長は、所員全員に召集をかけると共に、2名の所員を感震部設置地点周辺の工事等の有無確認に急行させた。

電話が鳴る。阿古地区住民から地震頻発の通報である。じりじりしながら所長は待った。

14時40分、急派した2名の所員が、息せき切って駆け込んできた。

「所長、周辺に工事等ありません」

詳しい状況報告を受けた後、所長は電話のダイヤルを回した。

島の東部、三池港に近い三宅村役場。村長室の電話が鳴った。14時46分。「火山性地震多発、要注意」

測候所長からの緊急電話である。村長(病氣療養中)代理長谷川助役は、直ちに東京都三宅支庁長に連絡した。三宅支庁長は更に三宅島警察署長と都庁第1庁舎4階の東京都総務局災害対策部長に通報、災害対策部長は情報連絡態勢を指示。関係防災機関も同様の態勢に入った。

15時、測候所は震度2の地震を観測した。噴火はまだ起こっていない。不気味な時間が過ぎてゆく。

20分近くが経過した。島南東部、阿古集落の中にある阿古駐在所の西田巡查夫人は、居間でテレビを見ていた。夫はパトロール中である。突然、地底から突きあげるような地震。今日は午後から何回か小さな地震があった。夫の転勤で1ヵ月前にこの島に来たばかりの西田夫人は不審には思ったが、これが結果的に噴火に結びつくものとは思ってもよらなかった。

[『記録 昭和58年三宅島噴火災害』東京都(1985/9), p.39-40]

2. 1983 年（昭和 58 年）噴火による被害

01. 溶岩は阿古集落を襲い、一夜にして焼失埋没させた。

昭和 37 年 8 月 24 日の噴火以来沈黙を続けていた雄山は、昭和 58 年 10 月 3 日 15 時 23 分頃、雄山中腹にある通称「二男山」付近から突然大爆発を起こし、島の南西部から南東部一帯にかけて甚大な被害をもたらした。

二男山付近の噴火は、割れ目噴火により雄山の南々西に位置する新漣池に至るまで拡大していった。縦一線に並んだ噴火口からは、真っ赤な溶岩がカーテン状となって高さ 100m 以上に噴き上げられ、噴煙は 1 万 m の高さにまで及んだ。

流れ出た溶岩は、途中山林や原野を焼き、農地や都道をのみ込み、噴火後約 2 時間で島内最大の集落である阿古集落や栗辺地域に達し、阿古地区の南部と西部は大きな被害を受けた。阿古集落を襲った溶岩流は、330 世帯の住家や阿古小・中学校、給食センターなど主要な公共施設を一夜にして焼失埋没させてしまった。[『記録 昭和 58 年三宅島噴火災害』東京都(1985/9), p. 102]

02. 住民の避難誘導に当たっていた消防団員や警察官が孤立したが、地元の漁船によって救出された。

阿古集落では、最後まで踏みとどまって住民の避難誘導に当たっていた消防団員や警察官を含む住民等約 80 名が孤立し、その安否が気遣われたが、地元漁船の敏速な救出により全員無事、阿古漁港から脱出に成功した。[『記録 昭和 58 年三宅島噴火災害』東京都(1985/9), p. 102]

03. 噴き上げられた火山灰や火山礫は、山林、畑作物、漁場、都道などに大きな被害をもたらした。

栗辺地域を襲った溶岩流も山林などに被害をもたらしながら数戸の住家を呑み込み、海岸にまで達した。

一方、噴き上げられた火山灰や火山礫は、西風によって坪田地区の広範囲に降り、山林、畑作物、漁場、都道などに大きな被害をもたらした。坪田地区では平均 18 cm の降灰礫に埋まり、住家は屋根に積もった灰の重みで危険な状態になったが、懸命な降灰作業により最悪の事態には至らなかった。

また、都道は降った積もった火山灰礫のため通行不能の状態となり、避難やその後の救援活動に支障をきたし、溶岩流によって遮断された阿吉地区を含め、一時は島内唯一の幹線道路が麻痺状態に陥った。更に三宅島空港の滑走路も全面厚さ 6 cm の灰に覆われ完全に機能を奪われたが、懸命な降灰作業によって翌 4 日正午すぎには、早くも救援のための一番機を迎えることができた。

坪田地区を襲った降灰によって最も大きな被害を受けたのは、山林、農作物などであった。この坪田地区は、農作物や花卉類の栽培が島内で最も盛んなところであり、特に島の

主要産物であるキヌサヤエンドウはすでに播種を終えたばかりの時期であったことから被災農民に大きな衝撃となった。

(中略)

この夜、島内最大の水道水源池である大路池が、大量の降灰により機能を失ったため1,782世帯が断水し、溶岩流や火山灰により停電した世帯は約700世帯に及んだ。

[『記録 昭和58年三宅島噴火災害』東京都(1985/9), p.102-105]

04.瞬間風速40mを超える台風第13号は被災地を泥沼にし、その後の降灰処理を一層難しいものとした。

このように大きな被害をもたらした降灰は、10月10日夜からの天候の悪化によって、新たな不安を呼ぶこととなった。すなわち、台風13号の接近による火山灰泥流の心配である。10日の夜から11日の朝にかけ住民や警視庁機動隊・消防団による「土のう」の積みあげ・溝掘りなどの泥流防止作戦が懸命に続けられた。幸いにして2次災害の発生を防ぐことはできたが、瞬間風速40mを超える暴風雨のあとの被災地は、まさに泥沼の様相を呈し、その後の降灰処理を一層難しいものとした。[『記録 昭和58年三宅島噴火災害』東京都(1985/9), p.103]

05.噴火に伴う震度5、マグニチュード6.1の地震に不安を抱き、島外避難を決意した島民が多かった。

今回の噴火に伴う火山性地震は有感地震だけで通算100回に及ぶものであったが、このうち最も大きかったのが噴火当日の22時33分に起こった震度5、マグニチュード6.1の地震であった。この地震で島民の中には再び噴火が起こるのではないかと不安にかられ、島外脱出を決意した人も多く、翌4日には阿古地区住民ら約400人が三池港から島外に避難した。この地震では、島内の至る所でたんすの上から物が落ちたり、棚に積まれた商品が崩れ落ちたり、瓶が割れたり被害が発生したが大事に至ることはなかった。しかし、この地震は避難所に身を寄せ、ろうそくの灯のもとで不安と焦燥感から疲労の極にあった被災者に追い打ちをかけることとなった。[『記録 昭和58年三宅島噴火災害』東京都(1985/9), p.103-105]

06.噴火は観光地への被害も大きなものであった。

今回の噴火は観光地への被害も大きなものであった。新漣池は七色に変化する美しい池で周辺は緑豊かな野鳥の宝庫として三宅島観光の目玉であったが、前記水蒸気爆発により今は一滴の水もなく見る影もない姿に変わっている。また、タイロモの生息地として有名な大路池も大量の降灰により、池の底に灰が積もりタイロモの生死が気遣われている。大路池を囲んでうっそうと繁っていた森林も降灰で枝葉が枯れ噴火前の姿はない。更に雄山中腹の列状噴火口近くにあった島内では最大のレクリエーション施設であ

るレストハウス、テニスコート、展望台、牧場なども噴火による熱風、溶岩流、降灰礫によって埋もれあるいは焼失してしまった。[『記録 昭和 58 年三宅島噴火災害』東京都(1985/9), p.105]

07. 人的被害は奇蹟的にも皆無であった。

以上のように今回の噴火災害は大きな被害を出したにもかかわらず、人的被害は奇蹟的にも皆無であった。噴火当日、三宅小・中学校体育館の避難所へ避難した阿古地区住民を点呼確認したところ、2 名が行方不明であることが判明し安否が気遣われたが、懸命な捜索救助活動により、翌4日6時55分1人を、続いて10時20分残る1人をそれぞれ無事に救出した。この結果、行方不明者もなく、死傷者もなかったため人的被害ゼロとなったのである。[『記録 昭和 58 年三宅島噴火災害』東京都(1985/9), p.106]

08. 噴火直前に行われた大規模な「東京都総合防災訓練」は、噴火当日に十分に成果が現れた。

人的被害が皆無であったことについては、いくつかの理由をあげることができるが、一つには噴火直前の8月24日に行われた大規模な「東京都総合防災訓練」がある。この訓練は雄山の噴火を想定し、都各局、警視庁、東京消防庁、陸海空自衛隊、海上保安庁、三宅村等の機関及び地元住民等約30団体3,000人が参加し本番さながらに行われたが、噴火の当日この訓練が十分生かされその成果が現れたことは特筆すべきことといえよう。また、火山島に住む住民としていざという時どう行動するかを常に心がけていた島民の機敏な対応と冷静沈着な行動もその理由の一つである。更に、三宅村が同報無線を駆使して迅速的確に避難勧告や情報提供・デマの否定など人心安定のための放送を行ったため、住民が混乱なく避難できたこともその理由としてあげられる。[『記録 昭和 58 年三宅島噴火災害』東京都(1985/9), p.106]

09. 人的被害がなかったことは再建に向けて立ち上がる被災者にとって何ものにも代え難い支えとなった。

人的被害がなかったことは、噴火後の災害復旧作業の早期着工を可能とし、復興のテンポを早める大きな力となるとともに、再建に向けて立ち上がる被災者にとっても、何ものにも代え難い支えとなったのである。[『記録 昭和 58 年三宅島噴火災害』東京都(1985/9), p.106]